

子どもの成長発達に応じて必要な事故防止対策について学生たちが学んだ講義(京都市中京区・京あんしん子ども館)



子どもの事故防止 学び広がれ

中京の施設で学生ら

同センターは子どもに関わる仕事を
目指している学生を対象に講
義を実施している。この日は京都
橋大看護学部1年生が参加し
た。

正しく着用第一

子どもの事故による死因の多く
は、交通事故、溺水、窒息、誤飲、鼻
や口の閉塞で、これら三つへの対
策がまず重要になる。

交通事故については、自動車乗
車中のチャイルドシートの正しい
装着や、自転車に乗せているとき
のヘルメット着用の大切さを事故
時のデータを示しながら強調。1
歳未満の子どもの場合は安全に
自転車に乗せることは難しいた
め、他の移動手段を使うことを求
めた。

溺れる時は静か

溺水については、自宅風呂での

子どもの成長発達に応じた事故防止対策を大学生が学ぶ講義が京あんしん
子ども館(京都市子ども保健医療相談・事故防止センター、中京区)で開か
れた。長村敏生センター長が子どもの事故で多い交通事故や溺水、誤飲とそ
の予防について説明した。
(稲庭篤)

自転車 1歳未満の同乗避ける / 溺水 残し湯やめる / 誤飲 物片付ける

対策として▽子どもが一人で浴室
に入れないようにする▽残り湯の
習慣をやめる▽子どもと一緒に入
っているときには絶対に目を離さ
ない▽の三つを挙げた。子どもは
「溺れるときに大きな声を上げた
り、暴れたりする」との先入観があ
るが、実際には息がでずに「静
かに溺れる」。シャワーで頭を洗
っている短い時間でも危険とい
う。119番して救急隊が来るま
で8〜9分かかるが、心停止から
3分で死亡率は50%を超えるので
「発見者が現場で心肺蘇生法を直
ちに開始しなければいけない」と
した。

発生率高い日本

誤飲については「乳児は生後5
〜6カ月で正常な発達行動として
手にした物を何でも口に持って行
く」と説明。日本は靴を脱いで家
上がり、畳や床で過ごす生活様式
もあって、日本の誤飲の発生率は
世界的に高いという。

誤飲を防ぐためには、子どもの
手が届く範囲を確認することが大
切で、子どもの口の中に入る直径
39mm以下の大きさの物は常に片付
ける。窒息と溺水は、健康な状態
に戻るか、脳障害や死亡するかの
どちらかしかない。予防が重要と
強調。実際に起こった事故を説明
し、「事故は子どもが発達するから
起こる。『万が一』と油断せず、『起
こらう』と考えるべき」と話し
た。

窒息事故の対処として「口の中
に指を突っ込んで取り出そうとし
ない」。スパーボールなどつかみ
にくい物はかえって気道に入っ
てしまうため、たたくなど外から
圧をかけてはき出させる。予防の
ポイントとして▽遊びながら物を

食べさせない▽口に入れたまま会
話させない▽食事中にびっくりさ
せない▽食べることを強要しない
▽食事中はいつもそばで観察する
―を挙げた。

起こらぬ環境を

最後に長村センター長は「全て
の事故を防ぐことは不可能で、事
故による死亡や重症、後遺症を防
ぐことが重要」といい、重篤な事
故が起こらないようにする環境整
備の大切さを強調。学生たちに「自
分だけの知識にするのではなく、
子どもと保護者に伝えて指導して
ほしい」と求めた。

さらに、現在は日本にない「子
どもの事故防止センター」を国レ
ベルでつくり、事例や原因説明、
対策をまとめて提言することが今
後の事故防止につながることを今

講義の後、学生たちは館内のモ
デルルーム「子どもセーフティハ
ウス」を見学し、台所やトイレ、
風呂、ベランダなどでの転落事故
や誤飲などの防止対策を学んだ。
山川美空さん(18)「東近江市」
は「実際に起きた誤飲事故の話は
ショックでした。事故防止につい
て今後も学んでいきたい」と話し
ていた。



子どもセーフティハウスを見学して
誤飲などについて学ぶ学生たち